

大学への留学のしやすさを考える

—学生の視点から—

ボン研究連絡センター

菊池 南

## 1. はじめに

日本政府は、「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」（2013年6月14日閣議決定）の中で、グローバル人材の育成を強化するため、2020年までに日本人留学生を2010年の6万人から12万人へ、外国人留学生を2012年の14万人から30万人へ倍増させることを目標に掲げた。また、大学のグローバル化を推進し、今後10年間で世界大学ランキングトップ100に日本の大学が10校以上入ることを目指すとした。これを受けて、文部科学省は、国公私立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進として、2018年度は「スーパーグローバル大学創成支援事業」、「大学の世界展開力強化事業」等のプログラムを実施している。

一方、ドイツは、国際的に人気の留学先である。ドイツの大学における留学生数は、2017年に35万9千人（前年比5%増）となり、学生の約10人に1人は留学生となっている。ドイツの大半の大学は州の資金で運営されており、授業料は無料とされている。一般に教育の質は高く、大学間の質の差が少ないと言われる。

ドイツでは、ボローニャ・プロセスの一環として、48カ国と欧州高等教育圏の創設のための取り組みが進められている。1999年に始まったこの改革により、学士・修士の共通した学位制度が導入され、学生の流動性が促進されてきた。また、国際的に認知度の高い中核的研究機関を構築するため、2006年からドイツ連邦政府が主導して特定の大学に集中的に資金を投じる「エクセレンス・イニシアティブ」を実施している。

私の所属する筑波大学は、「国際性の日常化」を掲げ、国際化を推進する大学の1つである。2015～2018年で受入外国人留学生数は400人近く増加し2,457人に達するとともに、日本人学生の留学支援プログラムも拡充されてきた。これまでに締結された国際交流協定は合計375協定（2018年8月27日時点）に及び、12の国・地域に海外拠点設置されている。

私は2014～2016年、筑波大学で奨学金関連の窓口業務を担当し、外国人留学生の受入や日本人学生の海外留学に携わった。国際化に向けて学内の環境が変わっていく中で、大学全体として、英語での学内の情報共有や、学生の目線に立った対応ができているかという点に課題を感じた。

今回、国際協力員としてドイツに赴任することとなり、日本とドイツの大学における留学生の受入体制を学生の視点から比較したいと考えた。ドイツの大学は留学生に人気であることから、英語対応をはじめとする留学生の受入体制は進んでいることが予想される。ドイツは非英語圏であるという点で日本との共通点がある。実際にドイツで生活したところ、日常的にはドイツ語表記しか見られず、英語が通じないことも多かった。生活面で現地語の能力が必要とされる点では、日本と似た環境にあると言えるだろう。

そこで、本調査では、日本に留学した学生と、ドイツに留学した学生にそれぞれインタビューを行い、実際の経験に基づいた学生の声を聴くことで、大学への留学のしやすさを考察することを目的とする。

## 2. 調査方法

### 2-1. 目的

- 学生が留学を通じて、どのような大学の仕組みを活用し、大学生活を送っているのかを知るため、現地の学生にインタビューを行う。
- 留学中に予想される言語面での困難について知るため、現地語の学習状況や現地でのコミュニケーション方法について質問する。
- 大学の仕組みやサービス等についてどう感じたかを知るため、意見があれば話してもらう。
- 日本とドイツの大学を比較する観点から、留学先大学と所属大学との違いを感じた点があれば話してもらう。

### 2-2. 対象

ドイツの大学へ留学中の日本人学生	3人 (A、B、C)
日本の大学へ留学経験のあるドイツ人学生	2人 (D、E)

	A	B	C	D	E
所属大学	筑波大学	筑波大学	筑波大学	ボン大学	ボン大学
学年	学部3年	学部3年	-	学部5年	学部4年
留学時期	2017年9月 ～2018年8月	2017年8月 ～2018年8月	2017年10月 ～2018年8月	2015年9月 ～2016年8月	2015年10月 ～2016年8月
留学先大学	ボン大学	ケルン大学	ルール大学 ボーフム	筑波大学	慶應義塾大学
インタビュー実施日	2018年 7月24日	2018年 7月30日	2018年 6月15日	2018年 6月29日	2018年 7月24日

(インタビュー時点での情報。空欄は非公開希望)

### 2-3. 方法

- インタビューの事前準備は不要とした。
- 参考として、質問項目を対象学生へ事前に送付した。
- インタビューの言語は、日本語あるいは英語のうち学生が話しやすい方を使用した。
- 当日は、カフェで30分～1時間程度、リラックスした雰囲気では話を進めるよう努めた。
- インタビューは質問項目に沿って行い、関連する出来事についても、併せて話を聞いた。

### 2-4. 質問項目

- 1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。
  - なぜその国を留学先に選んだのですか。

- ▶ なぜその大学を選んだのですか。
- 2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
- 3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていますか。
- 4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていますか。
  - ▶ 先生、友人、大学スタッフなど、人によって使用する言語が異なりますか。
  - ▶ 授業、休み時間、サークル活動など、場面によって使用する言語が異なりますか。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありますか。
  - ▶ 掲示が現地語のみでわからない、生活で困ったことがある等。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありますか。
  - ▶ 例えば、大学のサービスで良かったことや助かったことがあれば教えてください。
- 7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありますか。
  - ▶ 例えば、大学のサービスで、困ったことや不便だと感じたことはありますか。
  - ▶ こういうサポートや仕組みがあると良いと思うことはありますか。
- 8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じることはありますか。また、どんなところからそう思いますか。
  - ▶ 最初、抵抗があったり、理解が難しかったりしたことはありましたか。
  - ▶ 大学システムやサービスの面で違いを感じることはありますか。

### 3. 調査結果

#### 3-1. A さん（筑波大学、学部3年、2017年9月～2018年8月にボン大学へ留学）

インタビュー実施日：2018年7月24日

- 1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。
  - 美術史の中でも、特に近現代のドイツ美術史を専攻。ドイツ語能力の習得、資料の収集、現地の文化を学ぶことを主な目的として留学を決めた。
  - 留学先のボン大学を知ったきっかけは、ボン大学から筑波大学に来ていた留学生。ボン大学への留学経験のある日本人の先輩にも話を聞くことができ、美術史の研究ができる場所があることや、留学生に対して親切な大学であることを聞いた。
  - ボン大学は筑波大学との協定校であり、安心感があった。
  - 留学中はJASSO奨学金を受給でき、またドイツは物価が安いことも良かった。
- 2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
  - 大学入学後、第二外国語として2年間勉強（週2回の授業）。
  - 日本では、読み書き、文法が中心であり、話すことはほとんどできなかった。
  - 留学前のドイツ語能力はA1～A2。
- 3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていますか。
  - 留学生用のドイツ語コースを受講（週2～3回の授業）。

- 冬学期は初級コース、Speaking コース、春学期は Speaking コース、Writing コース等を受講。
- 4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていますか。
- 留学開始の冬学期では、英語を使うことが多く、ドイツ語のコース以外はほとんど英語を使用。
  - 半年後の春学期では、日常生活のほとんどの場面でドイツ語を使用。
  - 公的手続の場面（銀行手続きなど）は、難しい用語が多いため、英語を使用。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありますか。
- 大学内では、留学生とわかると英語で話しかけられたため、会話は問題なかった。
  - 最初はドイツ語があまり話せなかったため、大学外で道に迷ったときなどに困ることがあった。特に、ドイツ人の年配の方には英語が通じないことが多かった。
  - 大学内では、重要な情報について英語も併記される場合もあるが、大抵はタイトルのみ英語で、本文はほぼドイツ語で記載されていた。
  - 授業の登録、家に届く重要な手紙（公共料金の通知等）等、ドイツ語でわからず困ったときもあったが、友人に聞いて手伝ってもらい、解決した。
  - ボン大学では、留学生 1 人につきバディ<sup>1</sup>の学生 1 人をアレンジしてくれるが、大学側の登録漏れで自分にはバディがいなかった（他にも何人か同様の留学生はいた）。しかし、仲良くなった友人のバディに助けってもらったため、特に問題はなかった。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありますか。
- 留学生に対する大学側のサポートが手厚く、留学生対象イベントも充実していた。留学生が困りそうなことをスタッフがよくわかってくれていると感じた。
  - ボン大学 International Office 主催のバディイベント（留学生とバディが参加）があり、そこで友人と知り合うことができた。アジアからの留学生のバディは大抵英語か日本語を話せるので、仲良くなるが多かった。
  - ボン大学の日本語学科は規模が大きく、日本人留学生に興味を持ってくれる熱心なドイツ人学生が多かった。ドイツに来て日本語を聞けることはとても安心だった。
  - 大学側で学生のビザの代理申請をしてくれたことが助かった（申請を忘れたり、言語面で困ったりすることがなかった）。
  - 本人の希望により大学寮が割り当てられ、到着日に入居できた。寮には 2 タイプ（A タイプ：共用スペースありの部屋、B タイプ：個室のみの部屋）あり、比較的安価で入居できた。A タイプは B タイプより安価で、留学生だけでなくドイツ人を含む色々な入居学生の友人ができたことは良かった。
- 7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありますか。
- 目立った不便な点はなく、基本的には満足している。
  - BASIS という学籍情報登録システムがあったが、留学生は BASIS で履修登録がで

<sup>1</sup> ボン大学 International Office で行われている Study Buddy Program では、留学生のバディとなるドイツ人学生のマッチングを行っている。バディとなったドイツ人学生は、留学生の日常生活のサポートを行ったり、様々なバディイベントに留学生と一緒に参加したりする。留学生のサポートだけでなく、ドイツ人学生にとっても留学生との交流や文化の相互理解の良い機会となることを目的としている。バディを務めた学生には、証明書の発行や単位の認定も行うことができる。

きず、様式を記入してメールでオフィスに送付することにより履修登録していた。システムが使えるとより便利だった。

- BASIS の情報はドイツ語だったため、使い方、授業検索、履修のシステムや学生の区分による決まりを理解するのが最初は難しかった。
- 正規の学生と違って、留学生がどの学生の区分に当てはまるのかわからないことがあった。先生も把握しておらず授業で混乱することもあった。
- A タイプの大学寮では、共用スペース（キッチン、シャワー、トイレ等）は汚かった。

8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じるころはありますか。また、どんなところからそう思いますか。

- 学生同士は対等で、日本のような年功序列が存在しなかった。年齢や学年が違っても気にすることなく、学生同士はみんな Du<sup>2</sup>の 2 人称を使って話していた。
- 授業では、学生が自分からたくさんの発言や質問をしていた。
- 多くの聴講生が授業を聞きに来ていた。年配の方も多く、授業によって聴講生の方が多いこともあった。
- 外国語学習では、Speaking が重視されていた。タンデムパートナー<sup>3</sup>との学習が主流で、人と話す機会を作って言語を学んでいる人がとても多かった。仲良くなった友人とタンデムパートナーになることが多いようだった。

9) その他

- 留学では、顔を知っていて色々相談できる友人を作ることが大事かもしれない。
- ドイツのことをよく知ることができて良かった。また機会があればドイツに留学したい。

### 3-2. B さん（筑波大学、学部 3 年、2017 年 8 月～2018 年 8 月にケルン大学へ留学）

インタビュー実施日：2018 年 7 月 30 日

1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。

- 家族が仕事でドイツへの滞在経験があったことや、サッカーが好きなことから、ドイツに興味があった。
- 筑波大学ではドイツ語学を専攻。
- インターユニ・ゼミナール (Interuni-Seminar) <sup>4</sup>への参加がきっかけで、留学に興味を持った。ドイツ語で議論したことで、学習意欲が高まった。また、日本の大学に留学中であったドイツ人学生と知り合ってタンデムパートナーができた。
- 留学は初めてで不安もあったが、タンデムパートナーがケルン大学の学生で、色々

<sup>2</sup> ドイツ語には、Sie (2 人称単数の敬称、あなた) と Du (2 人称単数の親称、きみ) が存在し、相手や場面により使い分けられている。

<sup>3</sup> タンデムとは、語学を学ぶ者同士がペアになり、お互いの母国語を教え合う学習方法。例えば、ドイツ語を学びたい日本人と日本語を学びたいドイツ人がタンデムパートナーになり、日本語とドイツ語の勉強を協力して行う。

<sup>4</sup> インターユニ・ゼミナール (Interuni-Seminar) とは、日本の様々な大学や大学院でドイツ語を学ぶ学生や卒業生のための、合宿形式のゼミ。様々な専門分野の学生が集まって、ドイツ語でディスカッション等を行う。

話を聞くことができたため、留学先をケルン大学に決めた。

- 2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
  - 大学入学後、約2年半勉強。第二外国語としてドイツ語の授業（週2回）、言語学としてドイツ語を扱う専攻の授業を受講。
  - **Speaking** の授業はなかったため、授業でドイツ語を話す機会はなかった。
- 3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていますか。
  - 留学生用のドイツ語コース（週2回）、集中のコース（週1回）を受講。授業中に意見を求められるため、話すことが必要。グループディスカッション等もあった。
  - タンデムパートナーがケルン大学に戻った後、引き続き一緒に学習した（週3回）。
- 4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていますか。
  - 留学開始時から、日常生活はほぼすべてドイツ語を使用（英語よりドイツ語の方が得意であるため）。
  - 留学生向けのドイツ語クラスでは、英語で話す学生も多かった。
  - 日本人の友人（留学当時、ケルン大学には20人ほどの日本人学生が在籍）、タンデムパートナーとは日本語で話すこともあった。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありますか。
  - 大学の入学手続き、寮の手続き、授業の履修等。留学開始時はドイツ語初級レベルだったため大変だった。大学スタッフは英語でも対応できたが、英語も難しかった。
  - 授業の履修は大学のシステムで可能だったが、使い方に慣れるまでは難しかった。
  - 家に届く重要な手紙（公共料金の通知など）が難しいドイツ語でわからなかった。
  - 住民登録等の手続きは、タンデムパートナーと一緒にしてもらった。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありますか。
  - 留学後すぐに開催された留学生向けのオリエンテーションは、学内手続きの情報や資料をもらえて助かった。参加できなかった学生は、大変そうだった。
  - 授業料が無料。また、**Semesterticket**<sup>5</sup>は、ノルトライン=ヴェストファーレン州の公共交通機関に乗り放題となるため、通学等の移動にとっても助かった。
  - ケルン大学には日本学部があり、そこで開催された日本人留学生対象の **Welcome Party** に参加できたことはとても良かった。ドイツ人の友人を作る機会はあまりない中で、ドイツ人学生や日本人学生と知り合う良いきっかけとなった。
- 7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありますか。
  - 最初の手続きの段階で、日本学部のイベントについての情報やサポートがあったら良かった。タンデムパートナーを通じてその情報を知ったが、慣れない段階で情報を集めるのは難しいため、学内にいるだけでは知ることができなかった。
  - 手続きごとに窓口の場所が異なり、わかりにくかった。**International Office** での手続きは入学当初のみで、その後は学部の窓口での手続きが必要なことが多かった。
  - システムに登録する際に問題があった時にどうしたらいいかわからなかった。留学

---

<sup>5</sup>毎学期、登録料等の諸費を支払うことによって、学生に提供されるカード。写真付き身分証明書の学生証としての役割もある。このカードにより、その大学の所属する州のすべての公共交通機関を無料で利用することができる。

生もシステムにより履修登録や学籍情報の登録を行うが、入学当初、学籍情報の登録がうまく反映されず困ったことがあった。どこに相談すればよいかわからなかったが、結局タンデムパートナーに代わりに電話してもらって解決した。

8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じるころはありますか。また、どんなところからそう思いますか。

- 外国人に対して英語を使ってくれと感じた。大学や街では、英語で話しかけられることが多かった。
- 授業の雰囲気が全く異なっていた。意見を求められたり、グループで話し合ったり、発言することが主であった。日本では授業中に話す機会がなく、クラスメートと関わる機会もなかった。授業は面白く、留学を通じて話すことが楽しくなった。
- 正規学生は主専攻と副専攻があり、1人1つの専攻を持つ日本とは異なっていた。
- 大学のサークルや部活の仕組みが異なり、日本のようなサークル・部活はなかった。Unisport<sup>6</sup>という大学が提供するスポーツはあるが、テーマや回数ごとの希望登録制でクラブとは異なっていた。

9) その他

- ドイツ語を主に勉強してきたが、英語の重要性も感じた。
- 日本でドイツ人の友人ができて留学したので、わからないことは聞くことができた。日本語、ドイツ語が話せる友人がいたことは、とてもありがたかった。

### 3-3. Cさん（筑波大学、2017年10月～2018年8月にルール大学ボーフムへ留学）

インタビュー実施日：2018年6月15日

1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。

- ドイツの移民や外国人の子供の教育について、ドイツで調査研究をしたかった。
- 筑波大学とルール大学ボーフムが協定を結んでいたため、交換留学制度を利用。
- 過去にボン大学への留学経験があり、再度ドイツへ留学したいと考えた。

2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。

- 高校で第二外国語が必修だったため、ドイツ語を選択。
- 大学入学後、ドイツ語学科に所属。毎日授業3コマ。ドイツ人の先生のゼミでは、ドイツ語を使用。

3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていますか。

- 授業は受講しなかった。

4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていますか。

- 基本的にドイツ語を使用（英語よりドイツ語の方が得意であるため）。
- 研究室メンバーの半数以上が留学生（スペイン、メキシコ、トルコなど）のため、共通言語として英語を使用（多言語話せる学生が多い）。

<sup>6</sup> UnisportあるいはHochshulesportとよばれる大学が運営する、学生及びスタッフ向けのスポーツプログラム。授業時間外に余暇活動として提供されており、日本の部活・クラブというよりは会員制のスポーツジムに近い形態。例えば、ケルン大学では、スポーツジムでのフィットネスプログラムや、サッカー、バスケットボールなどの球技、ダンス、武道、登山やハイキングなど、多種多様なプログラムがある。



- ゼミでは、ドイツ人より留学生が多いため英語を使用。ドイツ人が多かったときはドイツ語を使用。
  - Unisport に参加するときは、ドイツ語を使用。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありますか。
- ドイツ語はある程度できるが、細かい部分で困ったことはあった。
  - 調査研究のインタビュー等を行うにあたり、ドイツ語表現が単純になってしまっていると感じた。もっとレベルアップしたかったが時間がなく注力できなかった。
  - 留学生の多い研究室にいと、ドイツ語を話す機会が少なく、逆に英語を話すこと（ゼミ、学会等）に課題を感じた。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありますか。
- 全体的にとっても良かった
  - International Office で質問や相談をすれば、大抵何でも解決できた。
  - 留学前に、入学手続き、住む場所のことなど生活について色々な情報をメールで提供してくれた。手続きのやりとりの際、メールの返信も早かった。
- 7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありますか。
- 特になし。International Office で聞けばすぐに解決でき、どこの部署に聞いたら良いかわからないということがなかった。
  - タンデムの制度を利用したが、自分に合ったパートナーではなかったため続かなかった。大学側では、入学のタイミングのみでマッチングを行っているようだったが、語学のレベル、性別、興味などによって相性が合わないこともあるため、継続するのは難しかった。
- 8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じるところはありますか。また、どんなところからそう思いますか。
- 授業の単位の取り方が異なっていた。日本では、学部ごとに大まかに決まっている科目の中から選んで単位をとるが、ドイツはモジュールごとに順序や関連科目のグループが決まっており、それに従って授業を取らないと単位が出なかった。
  - ドイツは日本より学費が安かった。ドイツでは、学期ごとに Semesterticket の料金を支払い、払わないと学生証が無効になる仕組みだった。
  - 日曜日は、大学も研究室も閉まるため、建物に入れなかった。
  - 研究室の位置付けが異なっていた。大学院生（文系）の研究室が存在せず、また学生だけが集まる場所や部屋がなかった。博士課程の学生の一部（講師等を担当している学生）だけ、部屋が提供される場合もあった。

#### 3-4. D さん（ボン大学、学部 5 年、2015 年 9 月～2016 年 8 月に筑波大学へ留学）

インタビュー実施日：2018 年 6 月 29 日

- 1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。
- 専門はアジア研究、専攻は日本語で、日本語と日本の文化を学びたかった。
  - 筑波大学はボン大学と協定校であったため、留学先の候補とした。

- 筑波大学に留学経験のある友人がいて、話を聞くことができた。つくばは東京に比べると物価が安く、キャンパスの自然が豊かで良かった。
  - 社会学に強い大学であると聞いた早稲田大学、上智大学にも興味があった。
- 2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
- 大学入学後、2年間勉強（週3、4回の授業）
  - 独学でも勉強。
  - 読み書きは少しできて、授業の問題は解けたが、話すことはほとんどできなかった。
- 3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
- 留学生コースを受講（週5、6回の授業）
- 4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていましたか。
- 留学生同士では、英語を使用。ドイツ人留学生とはドイツ語を使用。
  - アジアからの留学生は、英語よりも日本語が得意である場合が多く、よく日本語で話していた。
  - 弓道のサークルに入っていたが、日本人しかいなかったため、日本語を使用。日本人学生と英語で話すことはほとんどなかった。
  - 留学生センターのスタッフとは、数回英語で話したことがあるが、大学スタッフとは主に日本語で話していた。大学寮の事務所では、日本語しか通じなかった。
  - ドイツ語を学んでいる日本人学生とは、タンデムとして互いにドイツ語、日本語を使って教え合うこともあった。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありましたか。
- 大学スタッフは日本語しか通じず、困ることがあった。日本語を上達させたかったこともあり、英語で話してもらおうよう頼むことはしなかった。
  - 市役所や学内での手続きは、すべてチューター<sup>7</sup>の日本人学生に手伝ってもらったため、問題なかった。書類、契約などすべて日本語だったため、1人では無理だった。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありましたか。
- 色々な学部の学生が1か所の大きなキャンパスに集まっていて、毎日他の学部の学生に会えるところが良かった。ボン大学は、建物が街に点在しており、他の学部の学生と会うこともなく、建物の場所もわかりにくい。
  - フィットネスジムが無料で使えたのはとても良かった。
  - 日本語のクラスの授業は、クラスの種類が豊富でとても良かった。文法だけでなく、日本語でのパソコンの使い方、方言の授業など様々な特別なクラスがあった。
- 7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありましたか。
- 入居する大学寮の部屋を替える希望を出したが、融通は利かなかった。1年間のみの留学であるため諦めた。しばらくすると慣れてきたものの、寮の部屋は狭く、共用のキッチンが汚かった。

<sup>7</sup> 筑波大学では、留学生支援のためのチューター制度が実施されている。入学当初の留学生が不便なく学習や生活ができるよう、日本人の学生がチューターとして、原則1対1で個別にサポートを行う。具体的には、留学生の日本語指導、学内外の案内、諸手続きのための市役所等への同行、買い物、宿舎探しの補助等のサポート。チューター学生は実施願および実施報告書を提出し、謝金が支払われる。

- 最初の学期は友人がいなかったため寂しかった。
  - 学内の手続きでわからないこともあったが、主にチューターの日本人学生に聞いて解決できた。
- 8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じるころはありましたか。また、どんなところからそう思いましたか。
- 特になし。大学のシステムやサービスについては共通する部分が多く、あまり違いを感じなかった。

### 3-5. E さん (ボン大学、学部 5 年、2015 年 10 月～2016 年 8 月に慶應義塾大学へ留学)

インタビュー実施日：2018 年 7 月 24 日

- 1) 留学先の国を選んだ理由を教えてください。
- アジア研究、日本語学科に所属。日本を含む東アジアの文化や言語について学び、勉強し始めた時から日本への留学を考えていた。
  - 慶應義塾大学とボン大学との交換留学プログラムに参加。
  - 留学前は、アジア研究の他に、他の専攻分野として経済学に興味を持っていたため、大学のレベルや専攻分野の点で慶應義塾大学が良いと思った。
- 2) 留学前に現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
- 大学入学後、2 年間勉強 (週 4 回の授業)。
  - 独学でも勉強。
- 3) 留学中は現地語の勉強をどのくらいしていましたか。
- 留学生コースを受講 (週 5 回の授業)。
  - 独学でも勉強。
  - 日本人と話す機会をつくるようにした。
  - 簡単な読み、書き、話すことはできるようになった。話すことや漢字はまだ難しい。
- 4) 留学中の大学生活では、どの言語でコミュニケーションをとっていましたか。
- ほとんど日本語を使用。日本語を話すように心がけていた。
  - 大学寮で留学生と話すときや、授業では英語を使用。
  - 剣道、サッカーの部活に入っていたが、留学生は他にいなかったため、部活では日本語を使用。
- 5) 留学中、言語の面で困った経験はありましたか。
- 日常生活の中で、時々困ることがあった。
  - 日本人の友達と横浜にいたとき、電車で財布を無くしたことがあった。警察に行ったり、各種カードのホットラインなどに電話したりと、すべて日本語で苦労した。警察はとても親切で、最終的に財布が見つかって届けられたことには驚いた。
  - 交換留学プログラムは英語コースだったため、すべての情報が英語だった。授業やレポートも英語であったため、困ることはあまりなかった。
- 6) 留学先の大学について、良かったところはありましたか。
- 大学側のサポートはとても良かった。International Office では、スタッフがいつも

親切に英語で対応してくれた。

- 授業の履修方法は整理されていてわかりやすかった。履修する授業について紙媒体で International Office へ提出する方法は、システムで行うよりも簡単だった。
- 慶応義塾大学では、慶應ともだちプログラム<sup>8</sup>により留学生と日本人学生のグループをアレンジしてくれたが、自分はタンデムパートナーと一緒にいることが多かった。

7) 逆に、留学先の大学について、不満な点や不便な点はありましたか。

- 留学生用の大学寮は、個室と共同キッチンがあったが、共同スペースが汚かった。同じ階には約 25 人の留学生と日本人学生 2 人が入居していた。日本人学生は相談に乗ってくれたが、留学生が多すぎて忙しく、気軽に相談できなかった。
- あまり日本語を使うことに迫られる機会がなかった。英語プログラムのため、すべてがほぼ英語で解決できたため、留學生活が簡単すぎたようにも感じた。
- 単位取得の関係で、慶應義塾大学ではボン大学ほど自由に授業を履修できなかった。

8) 留学先の大学と所属大学を比べて、違いを感じるころはありましたか。また、どんなところからそう思いましたか。

- スポーツやクラブの文化は異なると感じた。ドイツには日本のような部活はない。
- 部活の文化はとても難しかった。年功序列の先輩・後輩文化になじむことは困難で、理由を聞いても、それを理解することはさらに難しかった。剣道部に所属していたときは、日本人と同じように振る舞うことは難しかったが、なじむように努めた。
- 日本の授業では、出席や宿題など、定期的な授業への貢献が重視されていた。ドイツでは、授業への出席は全く関係なかった。

9) その他

- 日本語を使わなければならない機会があまりなかったため、英語プログラムではない方法で留学した方が良かったかもしれない。

---

<sup>8</sup>慶應義塾大学国際センターでは、学内で参加できる国際交流のひとつとして「慶應ともだちプログラム」を実施している。交換留学生を中心とした留学生と塾生のグループをつくり（塾生 2 人、留学生 3 人程度）、グループ内の交流を通じて、「留学生ともだちになる」ことを目的としている。ボランティアのため、費用補助はなし。

## 4. 考察

ドイツへの日本人留学生、日本へのドイツ人留学生に、留学経験に関してインタビューを行った結果、自身の留学経験におおむね満足している様子であった。これは、過半数の学生が再度の留学を視野に入れていたことから分かる。全体として否定的な意見は少なかったが、「英語プログラムではない方法で留学した方が良かったかもしれない (E さん)」という意見もあった。

留学先の選択 (質問項目 1) においては、学問分野や大学のレベルが主な理由の 1 つとなっていた。5 人中 4 人の学生 (A、C、D、E) は、大学間の交換留学制度を利用しており、大学同士の繋がりがあある大学を留学先の候補として選んでいた。そのうち E さんは、すべて英語による交換留学プログラムに参加し、「日本語を使わなければならない機会があまりなかったため、英語プログラムではない方法で留学した方が良かったかもしれない」と述べた。このことから、必ずしも英語プログラムが良いとは言えない面があることがわかった。また、4 人の学生 (A、B、C、D) は、留学経験のある先輩や友人の話を聞いて留学先の決定に至っており、留学経験のある学生が次に留学を考えている学生に影響を与えていることがわかった。例えば、A さんはボン大学からの留学生をきっかけとしてボン大学のことを知り、その後ボン大学への留学経験のある日本人学生に話を聞いた結果、留学先としてボン大学を選んでいた。このように、学生間での留学経験の共有が、協定校の認知度や留学先への関心の向上に繋がっていた。

質問項目 2、3 では、学生がどのくらい熱心に現地語を学んだかを聞いた。学生は現地語を学ぶことに積極的であり、学問分野として留学先の文化にも興味を持っていた。どの学生も留学前に大学で一定期間勉強し、初級レベルの語学力を身に付けていた。また、留学中も現地語を使うことを心がけており、滞在日数が増えるにつれて、現地語でコミュニケーションをとる回数が増えていた (「留学開始の冬学期では、英語を使うことが多く、ドイツ語のコース以外はほとんど英語を使用。半年後の春学期では、日常生活のほとんどの場面でドイツ語を使用 (A さん)」)。大学のスタッフに英語が通じにくい場合があっても、現地語を使う良い機会として好意的に受け止めている意見もあった (「日本語を上達させたかったこともあり、英語で話してもらうよう頼むことはしなかった (D さん)」)。

質問項目 5 で大学側の英語対応の面を尋ねた結果、ドイツと日本で違いがみられた。ドイツの大学に留学した学生からは、大学スタッフや教員を通じたコミュニケーションにおいて英語が通じなかったという意見はなく、むしろ大学内では皆、積極的に英語を使って話してくれたという意見があった (「大学内では、留学生とわかると英語で話しかけられたため、会話は問題なかった (A さん)」、「外国人に対して英語を使ってくれると感じた。大学や街では、英語で話しかけられることが多かった (B さん)」)。日本の大学では、International Office 以外の窓口や、学生同士では英語が通じなかったという意見があった (「留学生センターのスタッフとは、数回英語で話したことがあるが、大学スタッフとは主に日本語で話していた。大学寮の事務所では、日本語しか通じなかった。日本人学生と英語で話すことはほとんどなかった (D さん)」)。質問項目 6 の回答から分かるように、窓口におけるスタッフの英語対応は、学生の手続きの助けになっており、安心感を与えていた (「大学側のサポートはとても良かった。International Office では、スタッ

フがいつも親切に英語で対応してくれた (E さん)」。一方で、英語が比較的普及しているドイツの大学においても、大学内の情報はすべて英語併記ではなく、重要事項を除いて主に現地語で発信されていた (「大抵はタイトルのみ英語で、本文はほぼドイツ語で記載されていた (A さん)」)。

質問項目 6、7 で尋ねた大学の手続きの面では、手続き窓口や相談できる場所がはっきりしていること、手続き方法が簡単でわかりやすいことが、学生に良い印象を与えていた。留学生は、留学前から大学スタッフとメールでのやりとりを行う場合が多いが、大学スタッフの適切な問合せ対応やメール返信の早さは、信頼感を高めていた (「留学前に、入学手続き、住む場所のことなど生活について色々な情報をメールで提供してくれた。手続きのやりとりの際、メールの返信も早かった。International Office で質問や相談をすれば、大抵何でも解決できた (C さん)」)。

International Office で実施される留学生向けのオリエンテーションは好評であり、まとまった情報提供として効果的であることがわかった (「留学後すぐに開催された留学生向けのオリエンテーションは、学内手続きの情報や資料をもらえて助かった (B さん)」)。

留学生の履修登録や学籍登録等の方法においては、大学によって紙媒体とシステムによる方法とがあったが、どちらの方が簡単であるか、学生の間でも意見が分かれた。E さんは「履修する授業について紙媒体で International Office へ提出する方法は、システムで行うよりも簡単だった」と述べた。一方で、A さんは「(留学生はシステムを通じて履修登録ができなかったため) システムが使えるとより便利だった」と回答した。

他に日本とドイツの大学で違いを感じた点については、質問項目 8 で回答されているように、授業の雰囲気や学習方法、スポーツクラブの文化が主に挙げられた。授業について、B さんは「授業の雰囲気が全く異なっていた。(ドイツでは) 意見を求められたり、グループで話し合ったり、発言することが主であった。日本では授業中に話す機会がなく、クラスメートと関わる機会もなかった。(ドイツの) 授業は面白く、留学を通じて話すことが楽しくなった」と述べた。また、E さんは「日本の授業では、出席や宿題など、定期的な授業への貢献が重視されていた。ドイツでは、授業への出席は全く関係なかった」と述べた。学習方法について、A さんは「(ドイツの) 外国語学習では、Speaking が重視されていた。タンデムパートナーとの学習が主流で、人と話す機会を作って言語を学んでいる人がとても多かった」と回答した。スポーツクラブの文化について、E さんは「スポーツやクラブの文化は異なると感じた。ドイツには日本のような部活はない」と述べた。これらは、文化の違いによるところも大きく、大学のシステムやサービスについては、それほど違いを感じなかったようであった (「大学のシステムやサービスについては共通する部分が多く、あまり違いを感じなかった (D さん)」)。

留学生がわからないことや困ったことに直面したとき、大抵の場合、友人に相談して解決していることがわかった (「授業の登録、家に届く重要な手紙 (公共料金の通知等) 等、ドイツ語でわからず困ったときもあったが、友人に聞いて手伝ってもらい、解決した (A さん)」、「どこに相談すればよいかわからなかったが、結局タンデムパートナーに代わりに電話してもらって解決した (B さん)」)。

友人に比べると、大学スタッフや教員に相談することは少なかった。5人中4人(A、B、D、E)の学生は、留学先で友人をつくることの重要性を実感しており、留学直後は友人に色々なことを聞いて助けてもらったという意見があった。一方で、留学生は現地学生の友人をつくるのが難しいという意見も共通していた。留学生の授業は現地学生と別であることが多いため、

スポーツクラブやイベントへの参加、タンデムパートナーとの交流等、授業以外の機会をつくって交友関係を広げようと努めていた（「日本学部で開催された Welcome Party に参加できたことは、ドイツ人学生や日本人学生と知り合う良いきっかけとなった（Bさん）」、「剣道、サッカーの部活に入っていたが、留学生は他にいなかった（Eさん）」）。以上により、留学生が留学しやすいと考える最も重要なことの1つは、留学先で友人をつくることであることがわかった。

これに関連して、どの留学先大学でも、現地学生が留学生をサポートするプログラム（Study Buddy Program、チューター制度、慶應ともだちプログラム等）や留学生対象イベント等、留学生と現地学生との交流の機会を提供する取り組みを実施していた。特に、まだ友人も少ない留学直後は、各種手続き等で困難な場面が多く発生するため、このような取り組みが役立ったという意見もあった（「ボン大学 International Office 主催のバディイベントで友人と知り合うことができた（Aさん）」）。一方で、現地学生が留学生をサポートするプログラムでは、留学生と現地学生とのマッチングが難しい面もあり、他に友人ができた場合や相性が合わなかった場合には、あまり活用しなかったという意見もあった（「タンデムの制度を利用したが、自分に合ったパートナーではなかったため続かなかった。語学のレベル、性別、興味などによって相性が合わないこともあるため、継続するのは難しかった（Cさん）」）。また、イベントの周知が十分でなかったという意見があった（「最初の手続きの段階で、日本学部のイベントについての情報やサポートがあったら良かった。タンデムパートナーを通じてその情報を知ったが、慣れない段階で情報を集めるのは難しいため、学内にいるだけでは知ることができなかった（Bさん）」）。このように、今回インタビューを行った学生の留学先大学では、留学生が友人をつくるための取り組みが行われており、留学生にとってある程度役に立っていた点は評価できる。一方、マッチングや周知方法等に改善の余地が見られたため、現状の取り組みを効果的に運用していくための工夫が必要である。

## 5. まとめ

本調査では、日本とドイツの大学における留学生の受入体制を学生の視点から明らかにしたいという目的のもと、5人の学生にインタビューを行った。インタビューでは、言語面での困難、大学の仕組みやサービス、日本とドイツの大学間での違いという観点から質問を行った。

本調査を通じて、留学生にとって留学がしやすいと考える最も重要なことの1つは、留学先で友人をつくることであることがわかった。留学先の言語面での困難は主に友人を通じて解決されていた。また、友人同士での留学経験の共有が、留学先の選択にも大きな影響を与えていた。大学の仕組みやサービス面では、適切な情報提供と英語対応が、円滑な手続きの助けとなっていた。

今後、大学は国際関係部署での英語対応の確保、学生にとってわかりやすい手続きと情報提供を進めていくことが重要である。大学側で実施している留学生を対象とする取り組みにおいては、より効果的な方法を検証していく必要がある。さらに、学生間で留学経験を共有する機会を増やすことで、より多くの学生へ具体的な情報提供が可能となる。これらは、学生が留学しやすいと考える体制の整備に繋がる。

## 6. 謝辞

本報告書は、独立行政法人日本学術振興会（JSPS）による 2 年間の国際学術交流研修において、2 年目の海外実務研修期間中に行った調査研究をまとめたものです。

海外実務研修を遂行するにあたり、暖かく見守って下さった、ボン研究連絡センターの林正彦センター長、小平桂一前センター長、出口智子副センター長に心より感謝いたします。

研究協力第一課、国際企画課をはじめとする日本学術振興会の皆様には、特に 1 年目の東京本部での実務研修期間中、大変お世話になりました。ありがとうございました。

筑波大学総務部人事課の皆様には、本研修期間中、大変お世話になりました。このような研修に参加する機会を下さり、ありがとうございました。

筑波大学ボンオフィスの皆様には、インタビューに協力いただける学生を紹介していただき、大変お世話になりました。ありがとうございました。

国際協力員の同期生の皆様には、普段から良い刺激を受けるとともに、様々な助言をいただき、2 年間の研修を乗り切ることができました。ありがとうございました。

そして、本調査の趣旨を理解し、インタビューに快く応じていただいた学生の皆様に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- [1] 首相官邸, 日本経済再生本部, これまでの成長戦略について, 平成 25 年 6 月 14 日 日本再興戦略 -JAPAN is BACK- (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/kettei.html>
- [2] 文部科学省, 国公立大学を通じた大学教育再生の戦略的推進 (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/kaikaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/index.htm)
- [3] ドイツ学術交流会 (DAAD), Berlin, 17. Juli 2018 – Pressemitteilung gemeinsam mit dem BMBF und dem DZHW, Wissenschaftsstandort Deutschland international hochattraktiv (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
<https://www.daad.de/presse/pressemitteilungen/de/65451-wissenschaftsstandort-deutschland-international-hochattraktiv/>
- [4] ドイツ連邦教育研究省 (BMBF), 26.06.2018 Pressemitteilung: 057/2018, Ausländische Studierende bereichern Hightech-Land Deutschland (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
<https://www.bmbf.de/de/auslaendische-studierende-bereichern-hightech-land-deutschland-6451.html>
- [5] ドイツ学術交流会 (DAAD) 日本, ドイツ留学・研究, ドイツ留学への 8 つのステップ (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
<https://www.daad.jp/ja/study-in-germany/eight-steps-to-germany/finding-a-university/>
- [6] 文部科学省, 中央教育審議会, 質保証システム部会, 資料 3 欧州高等教育圏 (European Higher Education Area) について (2018 年 8 月 28 日アクセス)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/027/siryo/attach/1296409.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/027/siryo/attach/1296409.htm)



- [7] ドイツ連邦教育研究省 (BMBF) , 28.03.2018 PRESSEMITTEILUNG: 025/2018, Bologna Prozess betont akademische Freiheit als Voraussetzung eines global attraktiven Europäischen Hochschulraums (2018年8月28日アクセス)  
<https://www.bmbf.de/de/bologna-prozess-betont-akademische-freiheit-als-voraussetzung-eines-global-attraktiven-5924.html>
- [8] 国立研究開発法人科学技術振興機構 (JST) , 研究開発戦略センター (CRDS) , 2015年3月海外調査報告書 科学技術・イノベーション動向報告～ドイツ～/CRDS-FY2014-OR-01 (2018年8月28日アクセス)  
<https://www.jst.go.jp/crds/report/report10/CRDS-FY2014-OR-01.html>
- [9] 筑波大学国際室 (2018年8月28日アクセス)  
<http://www.kokuren.tsukuba.ac.jp/GP/gplist.html>
- [10] 筑波大学, 広報刊行誌 地図とデータで見る筑波大学リーフレット (2019年1月25日アクセス)  
<http://www.tsukuba.ac.jp/public/booklets/leaflet.html>
- [11] ボン大学, International Students, Study Buddy Program (2018年8月20日アクセス)  
<https://www.uni-bonn.de/studying/international-students/counseling-and-service/study-buddies>
- [12] ボン大学, International, Welcome Center for International Researchers, Language Courses, Tandem Language Learning (2018年8月20日アクセス)  
<https://www.uni-bonn.de/international/advice-contact/welcome-center/life-in-bonn/language-courses/tandem-language-learning/tandem-language-learning>
- [13] インターユニ・ゼミナール Interuniversitäres Seminar für deutsche und japanische Kultur (ドイツ語・ドイツ文化ゼミナール) (2018年8月20日アクセス)  
<http://www.interuni.jp/>
- [14] ボン大学, Studium, Vor dem Studium, Wohnen und Leben in Bonn, Semesterticket / NRW-Ticket (2018年8月21日アクセス)  
[https://www.uni-bonn.de/studium/vor-dem-studium/wohnen-und-leben-in-bonn/semesterticket-nrw-ticket?set\\_language=en](https://www.uni-bonn.de/studium/vor-dem-studium/wohnen-und-leben-in-bonn/semesterticket-nrw-ticket?set_language=en)
- [15] Unisport<sup>2</sup> Cologne (2018年8月20日アクセス)  
[http://unisport.koeln/index\\_eng.html](http://unisport.koeln/index_eng.html)
- [16] 慶應義塾大学国際センター, 学内で参加できる国際交流, 慶應ともだちプログラム (2018年8月21日アクセス)  
[http://www.ic.keio.ac.jp/keio\\_student/campusex/buddyprogramfall2018.html](http://www.ic.keio.ac.jp/keio_student/campusex/buddyprogramfall2018.html)